move! move!
静岡新聞 SBS

SBS静岡健康増進センター 公開講座2018

聞いてなるほど! いきいきライフ

全5回シリーズ 第3回 上

公益財団法人SBS静岡健康増進センター公開講座「聞いてなるほど！いきいきライフ」の2018年度シリーズ（全5回）第3回がこのほど、静岡市葵区のしずぎんホール「ユーフォニア」で行われた。前半は静岡市静岡医師会会長の袴田光治さんが「持ってますか、かかりつけの医師、歯科医師、薬剤師！」と題し静岡市の医療連携について講演した。その概要を紹介する。〈企画・制作／静岡新聞社営業局〉

持ってますか、かかりつけの医師、歯科医師、薬剤師！ 静岡市の医療連携について

公益財団法人 SBS静岡健康増進センター
〒422−8033 静岡市駿河区登呂 3-1-1 電話▶054（282）1109 URL▶http://sbs-smc.or.jp
主催▶公益財団法人 SBS静岡健康増進センター、静岡新聞社・静岡放送
後援▶静岡県、（一社）静岡県医師会、（一社）静岡県歯科医師会、（公社）静岡県薬剤師会、静岡市

医療機関・福祉への橋渡しも

袴田外科医院院長、静岡市静岡医師会会長
袴田 光治さん

はかまだ・こうじ 1955年、京都市生まれ。1974年、東京医科大学入学。80年、東京女子医科大学第2外科入局。87年、県立総合病院外科勤務。95年、袴田外科医院継承。2004年、静岡市静岡医師会理事。10年、同医師会副会長を経て16年から会長。

日本が直面する「2025年問題」

わが国の医師会は、日本医師会、都道府県別の医師会、さらに郡市医師会で構成されています。全国で約4万5000人の医師が登録し、日本医師会の執行部が日本の医療政策を決め、都道府県や郡市の医師会に投げかけています。

この日本医師会と厚生労働省が今、課題の一つに挙げているのが「2025年問題」です。1947〜49年の第1次ベビーブームで生まれた、いわゆる「団塊の世代」の方々が75歳以上になる2025年頃には、日本でさまざまな問題が起こると予測されているのです。

例えば65歳以上の人口が全人口の30%に達し、高齢者だけの世帯は1840万に増加します。少子化も重なり、75歳以上の1人の高齢者を、わずか3・3人の人で支えなくてはなりません。

また高齢者になると、病気にかかりやすくなって医療費が増えます。75歳を過ぎると、要介護・要支援になる可能性が急上昇し、介護保険による費用も増えます。さらに、2025年には65歳以上の認知症患者数が、730万人に上ると予想されています。

これらの問題に国が掲げる対策が「地域包括ケアシステム」です。これは、地域の医療・介護に携わる多職種の方と行政が連携し、患者が住み慣れた地で治療を受け続けられるように支えるまちづくりのことです。

この地域医療連携に重要なのが、かかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬剤師の存在です。

かかりつけ医とは、何でも相談ができ、新しい医療情報を熟知し、必要に応じて専門医や専門医療機関を紹介でき、地域医療、保健福祉を担える医師のことです。単に患者を診るだけでなく、病院と診療所をうまく連携させる力量が求められます。静岡市はこの病診連携に古くから力を入れ、全国的にも有名です。

診療所は気軽に行ける良さがありますが、夜間や急変時の対応、入院施設、医療機器設備の面で総合病院にはかないません。一方、病院は診療所の短所を補えますが、診察の待ち時間の長さ、往診がない、主治医が変わりやすいなどの短所もあります。つまり、お互いの利点がお互いの欠点であるわけです。

そこで、病院と診療所がタッグを組み、役割分担を決めて連携を取ることで、多くの問題解決の一助になると考えられています。

多職種が集まり支援態勢を協議

病院は、診療所で治療困難な患者が受診する医療機関です。緊急性がなければ診療所に行き、医師の判断で病院を紹介します。現在、病院の初診は診療所の紹介状が必要です。紹介状なしで400床以上の病院に受診すると、診療費以外に5000円と消費税がかかります。

実は静岡市の救急医療は現在、危機的な状態です。安定した医師の数を確保できない医療機関が増え、救急病院の輪番体制の維持が限界なのです。そんな中でもぎりぎりの状態で、病院の医師たちは尽力しています。皆さんも、病気の時はできるだけ日中の時間帯に受診するなど、気軽に救急外来にかからない配慮をお願いします。

さて、皆さんが安心して医療を受けられるためにも、そして医療従事者が安全に働けるためにも、静岡市静岡医師会は、各病院と、病院ごと・病気ごとの強力な病診連携をとっております。例えばがん治療であれば、S−NETという連携で、すでに5000人以上の患者さんを支えています。静岡市は、連携治療がどの病院でも同じ段取りで、全国的にも高い評価を受けています。また、医療関係者、行政など多職種が一堂に会し、治療法やサポート態勢について協議するなど、情報共有や研さんも行っています。

ほか、脳卒中や慢性腎臓病、慢性頭痛、閉塞性動脈硬化症、心房細動、虚血性心疾患、大腿骨頚部（だいたいこつけいぶ）骨折、前立腺がんのネットワークなど、特化した疾患における病診連携も行っています。このように、診療所の医師がかかりつけ医として、多くの病院連携システムに参加し、知識を得ています。

さらにかかりつけ医は、認知症対策、学校医、産業医、防災・救急医療の講師など、地域医療にも貢献しています。

歯科定期検診で疾患予防・発見も

次に、かかりつけ歯科医の話もします。医科と歯科が関係している病気の一つに、歯周病と骨粗しょう症があります。歯周病は多くの疾患を誘発するため、かかりつけ歯科医の定期検診が必要です。さらに、骨粗しょう症の治療にも歯科医師との連携が必要です。歯科で撮影した歯のレントゲン写真から、骨粗しょう症が発見できることもあります。

そしてかかりつけ薬剤師は、薬の管理、副作用の確認をする以外に、健康食品やサプリメント、服薬の管理、残薬の整理とそれに伴う医療機関への橋渡しもしてくれます。

これからの時代、住み慣れた地域で末長く生活するためには、近所にかかりつけの医師、歯科医、薬剤師を持つことが大切です。親身に患者さんの話を聞き、よく体に触れて体調を見てくれる方が理想です。皆さんそれぞれに合う先生は、必ずいるはずです。

今後も医師会、歯科医師会、薬剤師会は、静岡市の行政と病院、介護と連携して、皆さまに長く寄り添い、安心して暮らせるまちづくりに貢献してまいります。

古賀所長の 心を養う 養生術

第3回は、袴田光治先生にお話しいただきました。皆さまがかかりつけの医師、歯科医師、薬剤師をきちんと持っていただけることをあらためてお願いする次第です。私からは引き続き、『養生訓』のお話です。

9「養生の道を守る」君子といわれる昔の偉い人たちは、礼楽・弓・乗馬・詠歌・舞踏などをエンジョイすると同時に適度な運動や精神の静養を行い、病気を予防していた。病に倒れてから薬や痛い鍼（はり）、熱い灸（きゅう）などを行うのは、自分の体を痛めて病気を治すことであるから、自分の体にいいわけはない。国を治めることも同様で、国の治安が悪く乱が起きて、それを武力で鎮圧するのではなく、治安をいつも良くするように心掛ければ国民はいつも気持ちよく生活をすることができ、乱も発生せず、国を治める君子も国民から尊敬されることだろう。養生の道もまたこれと同じことである。

身体の養生と国家の養生（治安）は共通点が多く、極めて酷似していることを述べています。今回はこれにて。

古賀 震
1957年、福岡県生まれ。熊本大医学部卒。静岡県立大看護学部基礎医学分野（内科学血液腫瘍研究室）教授。2018年4月よりSBS静岡健康増進センター所長。